

報告番号	※甲	第	号
------	----	---	---

主 論 文 の 要 旨

論文題目 身体スキルの習得における個人特有の運動に関する検討

氏 名 市川 淳

論 文 内 容 の 要 旨

スポーツや演奏，身体表現を用いた芸術などの分野において，人は，日々の練習を通して，身体スキルを習得してゆく．身体スキルの習得を示すパフォーマンスとして，課題の成果を評価することが多い．近年，情報技術の発達により，身体スキルに関する研究は，学際的に取り組まれている．

一般的に，パフォーマンスの向上のためには，効率的で正確な身体動作の獲得，つまり安定した身体動作の獲得が重要であると言われている．そのような基本動作の獲得は，身体スキルを習得するうえで基盤になると考えられる．しかし，実際に練習を行う現場では，習得者が試行錯誤してゆくなかで，自分なりの「工夫」を見出して，他者やこれまでよりも高いパフォーマンスを達成することは多々あると言える．

そのような工夫を見出すうえでは，練習を通じた意識的活動による，個人の「意図」や「着眼点」が関係してくると考えられる．

本研究では，未経験者が練習を通して見出した工夫に注目した．そして，基本動作にあてはまらない動作を工夫を示す「個人特有の身体動作」とし，習得において観察されるかを実験的に検討した．さらに，個人特有の身体動作が観察された際，それが，習得に向けた意図や着眼点と関連するかについても合わせて検討した．

具体的な課題として，ボールジャグリングの中でも最も基礎的な課題である3ボールカスケードを取り上げた．カスケードでは，パフォーマンスとして，連続キャッチ数が客観的な評価の指標として挙げられる．本研究では，ジャグリング未経験者に対して，カスケードの練習を行わせた．そして，習得した初学者を対象に，個人特有の身体動作が観察されるかを検討した．さらに，個人特有の身体動作が着眼点と関連するかについても検討した．

本稿は5章から構成される．第1章の「序論」では主に，身体スキルに関する研

究が近年、学際的に取り組まれているということや、カスケードの実験課題としての特徴について詳細に述べた。そして、カスケードにおける基本動作の獲得や個人特有の身体動作の獲得、および意図や着眼点について検討することの重要性を議論した。

第2章の「習得段階と身体動作の安定性との関連」では、研究1として、基本動作の獲得に関して、「体幹」と「上肢」の運動の安定性が、先行研究で提唱された Stage 1 から Stage 3 の習得段階とどのように関連するかを検討した。

実験の結果、Stage 3 到達群（連続キャッチ数100回以上を達成した参加者群）では、Stage 2 到達群（連続キャッチ数50回程度を達成した参加者群）に比べて上肢の運動が安定し、エキスパート群（5ボールカスケードの身体スキルを習得している参加者群）の方が、Stage 3 到達群に比べて体幹の運動が安定したことから、各習得段階で安定する身体動作が異なることを確認した。研究1では、基本動作の獲得に関する先行研究の知見を確認するだけでなく、連続キャッチ数と対応づけて身体動作の安定性を議論することで、基本動作の獲得についての特徴を示した。

第3章の「習得過程における個人特有の身体動作の獲得」では、研究2として、連続キャッチ数100回以上を達成した習得者を対象に、個人特有の身体動作が、パフォーマンスの向上のために重要な役割を果たす工夫である可能性について検討した。さらに、それらの動作が、言語報告から確認される、個人の着眼点と対応づけられるかについても検討した。

実験の結果、習得者5名中2名において、体幹と上肢の運動に関する一部の指標で、基本動作の獲得に関して、先行研究で指摘される特徴にあてはまらない、個人特有の身体動作が観察された。さらに、それらは、その人独自の着眼点と対応関係にある可能性を示唆した。

第4章の「総合考察」では、本研究の知見を述べ、身体スキルの習得を検討するうえでは、身体動作と意識的活動との両者を踏まえた議論が重要であることを述べた。そして、今後の検討事項として、エキスパートレベルへの熟達に向けて、中級レベルの身体スキルの習得で観察された個人特有の身体動作が阻害要因になる可能性について言及した。さらに、指導者は、個人特有の身体動作が阻害要因になる場合のみ指導するのが望ましいことに関して、身体スキルの習得における支援から述べた。

最後に、第5章の「結論」で、本論文の総括を行った。